

平成31年度

目黒日本大学中学校

入学試験問題

国語

試験時間 50分

注意事項

- 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- この問題冊子は、全16ページあります。
- 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図がありましたら、解答用紙を取り出してください。
- 解答はすべて解答用紙の決められた欄らんに記入してください。
- 試験中に質問がある場合は、手を挙げて監督者かんとくに知らせてください。
- 試験終了後、監督者りょう かんとくの指示にしたがって問題冊子と解答用紙を提出してください。
- 解答は、特に指示がないかぎり、句読点や記号をふくむものとしします。
- 問題冊子および解答用紙に、受験番号・氏名を記入してください。

受験番号	氏名

一

次の各問いに答えなさい。

問1 次のぼうせん部の漢字の読みを答えなさい。

- ① 油断禁物。
- ② 危ういことをしてはいけない。
- ③ 門戸を閉ざす。

問2 次のぼうせん部のカタカナの漢字を答えなさい。

- ① キチヨウヒンを預ける。
- ② アメリカのダイトウリヨウが来日する。
- ③ 川幅をハカる。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

① 俳句にカタカナは使ってはいけないという人もいる。この問題はどうか考えたらいいたろうか。日本語の成り立ちを探れば、おのずからその答えがわかる。

古代の日本語には文字がなかった。音（声）だけの言葉だった。これがのちに大和言葉やまとと呼ばれるもの。四世紀末ころにやつと百済くだらの王仁わにによって中国の漢字が伝えられたといわれている。

② 当時の日本で漢字はどのように使われたか。漢字の使い方は三つ。

漢字の第一の用法は、漢字の音そのまま大和言葉の音に当てるもの。これが万葉仮名である。「あをによし」を「阿袁邇余志」と書くなど。ここからのちに、ひらがなとカタカナが生まれる。

第二は、漢字の意味をとって大和言葉に当てるもの。「あをによし」を「青丹良」と書くなど。「はな」を「花」、「て」を「手」と書くのもここに入る。これは日本人が漢字の一つ一つに音のほかに意味があることに気づいてからの用法。

第三は、音も意味もそのまま漢字を日本語として使うもの。「菊きく」「本」「乱」「愛情」「幸福」など。これは中国語をそのまま日本語として採用したということである。ここで従来の大和言葉とは別の言葉が日本語に移植された。漢字のこの用法によって日本語の表現力は飛躍ひやく的に高まった。

ここからわかるのは、漢字は第三の用法で使う場合を除けば、すべて当て字であるということ。季語でいうと、ホトトギスという鳥の名前は漢字では、時鳥、不如帰、子規、杜鵑、杜宇などいくつもの書き方があるが、これはそうした理由からである。

大和言葉の「おもう」には思のほか、もともと、想、憶、以、念、道、意、維、懐、謂、惟などいくつもの字を当てた。同じ「おもう」というも字ごとに少しずつ意味が違ちがっていた。今の常用漢字表では「おもう」には思の字だけを当てているが、本来、意味の違いに応じて使い分けるべきものだろう。

A 雁がん という漢字を「かり」とも「かりがね」とも読むのも同じ理由による。漢字の雁を大和言葉の「かり」にも「かりがね」にも当てたのである。

大航海時代、日本の室町時代も後期になると、ヨーロッパの文化とともにポルトガルやスペイン、オランダの言葉が大量に日本に流入した。「てんぷら」「かすてら」「びいどろ」「ぎやまん」「かるた」「めりやす」「どんたく」など、今も残っている言葉も多い。これが日本語になった西洋の言葉の第一波。

明治の文明開化の時代には、ヨーロッパばかりでなくアメリカの言葉も採り入れられるようになった。これが第二波。そして、第二次世界大戦後、アメリカ文化の影響下におかれた時代になると、アメリカの言葉が大量に押し寄せてくるようになった。これが第三波。今もこの第三波の時代がつづいている。

日本語の歴史を古代から現代までさつと眺めたわけだが、この国にはもともと文字をもたない大和言葉しかなかった。ここにさまざまな外国の言葉を迎え入れて、現在の日本語になったことがわかるだろう。

江戸時代の国学者、本居宣長は、

敷しまの倭ごころを人とはば朝日にほふ山ざくら花

本居宣長

と詠んだが、この歌は中国から渡来した漢字と漢字から生まれたひらがなで書かれている。「倭ごころ」をたたえる歌でさえ中国渡来の文字を借りなければ書けなかった。何という B だろうか。

実はこれは日本語だけのことでなく、この国の文化全般についていえることなのだ。この国の言葉ははじめ大和言葉しかなかったように、この国のはじめには緑の島々とそこを流れる四季のめぐりしかなかった。

この空っぽの空間にさまざまな文化を受け入れ、そのなかからこの国の土壌に合うものを選び出し、それをさらに長い年月をかけて作り変えてゆく。この C ③ ④ という過程こそがこの国の文化の基礎にある大事な仕組みである。

④ ことに生活の分野では海外から移入された文化は、兼好法師がうんざりしながら「家の作りやうは、夏をむねとすべし」(『徒然草』第五十五段)と書いたこの国の蒸し暑い夏に耐えるものでなければならなかった。家の造りだけでなく、服、食べもの、家具の数々。それが夏を快適に過ごすに役立つかどうか。少なくとも邪魔しないか。もしそうでないならば、手を加えてそうなるように改善(変容)するか、さもなければ捨て去るしかなかった。移入された生活文化にとっては、夏こそが試金石⑤ ⑥ だったのである。

はるかな昔から現在まで、日本の文化はこの過程を幾たびとなく繰り返しながら進んできた。日本語がさまざまな外来の言葉を咀嚼、吸収しながらたくましく成長してゆく姿はそのまま明らかで、夏こそが試金石だったのである。

こうみてくると、カタカナ言葉というだけで俳句から排斥しようとするのがいかに見の狭い発想かわかるだろう。こうした狭量さは俳句の

ためを思っているようでも長い目でみれば俳句をやせさせる。若い人の俳句にカタカナ言葉が多いのは **C** という日本化の過程の、まだ受容、選択の段階にあるということだろう。やがて、次の変容の段階へと進んでゆく。

俳句では、しばしば「この言葉を使ってはいけない」などという人がいるが、俳句に使ってならない言葉はない。どんな言葉でも必要だからこの世にある。むしろ、どんな言葉でも使いこなせなければならぬ。「使っていない」というのは、その人が使えないだけなのだ。

（長谷川權『一億人の俳句入門』）

問1 ぼうせん部②「当時の日本で漢字はどのように使われたか。漢字の使い方は三つ」とあるが、「漢字の使い方」を説明しなさい。

問2 **A** に当てはまる言葉としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 反対に イ 例えば ウ したがって エ むしろ

問3 **B** に当てはまる言葉としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 悲劇 イ 喜劇 ウ 偶然 エ 必然 オ 皮肉

問4 二か所ある **C** に当てはまる組み合わせとしてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 受容↓選択↓変容
イ 変容↓受容↓選択
ウ 受容↓変容↓選択
エ 変容↓選択↓受容

問5 ぼうせん部③「過程」をカタカナ言葉（外来語）で表現したものとしてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア プレッシュャー イ プライバシー ウ プライド エ プロセス

問6 「雪月花」という熟語がある。日本の自然の素晴らしさを表現したものである。雪は冬、月は秋、花は春の自然だが、夏については書かれていないのはなぜか。ぼうせん部④の内容を踏まえて、次の文章の空欄を埋めなさい。

・「雪月花」から夏の要素が抜け落ちているのは、夏が [] だからだ。少なくとも冷房の普及する以前、海辺や高原での夏の楽しみを知らなかった時代は、夏はただ耐えるしかない季節だった。このため、夏には雪月花に並べられるものがないと思われてきた。

問7 ぼうせん部⑤「試金石」の意味としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 貴重な物事 イ 価値を判断するもの ウ 最適な場所 エ 利益を得るもの

問8 ぼうせん部①「俳句にカタカナは使つてはいけないという人もいる。この問題はどうか考えたらいいだろうか」とあるが、その答えを次のようにまとめた。次の文の [I] [II] [III] に当てはまる言葉としてふさわしいものをそれぞれ本文中から決められた字数で抜き出さなさい。

・日本語は、 [I (十五字)] て、それを咀嚼、吸収しながら [II (七字)] してきたのだから、 [III (五字)] でも俳句には必要なのである。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。字数指定のある問題は句読点などの記号も字数に含みます。

「私」（森宮優子）は、義理の父（「森宮さん」と二人で暮らしている。高校三年生の「私」は二学期最後の行事である「合唱祭」でピアノ伴奏をする）ことになり、練習を始めた。

合唱祭の伴奏練習は二人ずつで組まれていたけど、私と早瀬君がペアになっている日はなかった。それでも、もう一度あのピアノが聴きたいという欲望は抑えきれず、多田さんに練習日を代わってほしいと申し出ると、「早瀬君と弾くと差が出ちゃって嫌だったんだよね」とすんなりと了承してくれた。

みんなで弾きあつてから二日後の伴奏練習。私が行くと、もう早瀬君は音楽室にいて練習をするでも楽譜を見るでもなく、壁に貼られた作曲家の肖像画を眺めていた。

「こんにちは」

私が近づいていくと、「ああ」と早瀬君は一瞬こちらを向いただけで、すぐに肖像画に目を戻してしまった。

ピアノはいつから弾いてるの？ 普段はどんな練習してるの？ 好きな曲は何？ 聞いてみたいことは次々頭を巡ったけれど、早瀬君は真剣に肖像画を眺めていて、どれも口にできなかつた。

「うーん。なんとか、ロッシーニだけじゃない？」

ひととおり肖像画を眺め終え、早瀬君が言った。

「何が？」

ロッシーニ。音楽の授業で有名なオペラの作曲をした人物だということを知った。その人がどうしたのだろう。

「ほら、肖像画みんな怖いじゃん。ベートーベンは不機嫌そうだし、バッハやヘンデルはやたら威厳を振りかざしている感じだし。とにかくみんなむっつりしてるだろ？」

「まあ、そうかな」

① 何の話が始まったのだろうと私が首をかしげていると、

「でも、ほら、これ。ロッシーニだけ若干笑って見えない？ 口元にも目元にもうつすら笑みがある」と早瀬君はふつくらしたロッシーニの顔を指さした。

「ほんとだ」

小学生の時は夜になると肖像画の目が動くときみなで噂していたくらい、どの顔も怖く見えた。だけど、よく見てみると、確かにロッシーニは気のよさそうなのんきな顔をしている。

「俺、この人好きなんだよな」

早瀬君はそう言った。

ロッシーニが好きだということは、早瀬君はオペラも弾くのだろうか。そう聞こうとする前に、

「ごめん、ごめん。ホームルーム長引いて。さ、やろうか」

と菊池先生が入ってきて、話はそこで途切れてしまった。

「じゃあ、二組、森宮さんから」

「はい」

私はピアノの前に座ると、譜面台に楽譜を立てた。鍵盤を端から順に眺めてから小さく息を吐く。よし弾ける。そう自分に言い聞かせてから、指を動かした。

「ひとつの朝」はゆったり始まり、だんだん勢いづいていく曲だ。激しくなりすぎないように音が走りすぎないように、歌声をイメージしながら弾いていく。最初弾いた時とは違い、指が滑ることはなくなったけれど、曲調の変化に合わせるのは難しい。それでも、気持ちを乗せながら、最後までなんとか弾き切った。

「だいぶ弾きこなせるようになってきたね」

弾き終わると、菊池先生がそばに来てそう言った。

「ありがとうございます」

「ミスタッチはなくなってきたけど、後はどうしても音が軽くなるところがあるから、そこを丁寧に抑えて」

「はい」

「それと転調のあと出遅れるのが気になるかな。こここの小節で……」

菊池先生のアドバイスを聞きながら、私はそつと早瀬君のほうを見やった。

私のピアノ、どう思っただろうか。へた過ぎて聴いてられないと感じただろうか。早瀬君は何食わぬ顔でぼんやりと窓の外を見ていて、どう思っているのかはわからなかった。

「じゃあ、次は早瀬君」

先生に言われピアノの前に座ると、前と同じく早瀬君はすぐさま弾き始めた。息を整えることも肩かたの力を抜くこともない。座って、鍵盤に指を置いたら曲が始まる。

早瀬君のピアノは最初から最後まで、圧巻だった。ミスタッチがないどころか、ぶれる音も流れてしまう音もない。一つ一つの音が生き生きと響いている。もう完成していると思っていたのに、二日前に聴いた時よりもっとダイナミックで繊細せんさいで、私は体中②がぞくぞくするのを感じながら聴きこんでいた。

「すごいね、早瀬君のピアノ」

音楽室を出ると、私はそう言った。早瀬君の演奏には、感動を伝えずにはいられない力がある。

④「えっと、君も」

「森宮って言います。二組の」

「森宮さんも上手だよ」

どこがだ。早瀬君と比べたら、私のピアノなんて初心者もいいところだ。私は首を横に振ふった。

「よく言うよ。まだまだ練習しないとだめなのに」

「そうかな。最初みんな弾いただろう？ あの時も一番いいと思った」

お世辞にしてもありえない早瀬君の言葉に、私は思わず笑ってしまった。

「あの時ミスしてたの、私だけだったけど」

「ミスタッチとかはおいといてさ。自分のピアノじゃないのに、すんなりと音楽室のピアノになじんで最初の音から柔やわらかかった」

「なじんでた？」

並んで歩くと、早瀬君の背はずいぶん高いのがわかる。私は少し見上げながら、聞き返した。

「そう。普通は普段弾いてるピアノと違ちがうと、やりにくいだろう」

「さあ……」

それはきつと我が家のピアノが電子ピアノだからだ。まるで違うから、音楽室のピアノに抵抗ていこうがなかったのかもしれない。

「俺は好きだけど。森宮さんのピアノ」

「え？」

「森宮さんが弾くピアノ、俺は好きだよ」

⑤ 早瀬君がさらりとそう言うのに、私の顔は一気に赤くなった。誰かだれに告白されたときなど比べ物にならないほど、心臓は高鳴っていた。

A 私が電子ピアノじゃなく、ピアノで練習をしていたら、⑥ どうなるだろう。夕飯中も私は早瀬君の言ったことを思い浮かべていた。⑦ 本物のピアノを毎日弾き込んでいたら、もっと上手になっているだろうか。もっと早瀬君が好きだと言ってくれるような音が奏でられるのだろうか。そんなことを考えていると、

「ああ、ピアノ欲しいなあ」

と思わずつぶやいていた。

「ピアノ？」

「そう。ピアノ」

「ああ、本物のね。俺の稼かせぎが良かったらピアノの三つや四つ買ってあげられるんだけどね」
向むかいの席から森宮さんが言うのに、私ははっとした。なんて失礼なことを言ったのだろう。

「いやいやいや。違う違う、電子ピアノで十分。うん、あのピアノ好きだし」

私が慌あわてて否定ひていするのに、

「またまた、ピアノと電子ピアノは音が格段に違うんだろ？ やっぱり本物がいいよな」

と森宮さんは味噌汁みそしるを飲み干してから言った。

「音なんてほとんど一緒いっしょだよ。それに電子ピアノには電子ピアノの良さがあるし。軽いタッチだから疲れつかれないし、ヘッドホンつければ、夜中だって弾ける」

「どうしてそんなに電子ピアノの肩持かたもちつのか？ 優子ちゃん、ピアノ欲しいくせに」

「そんなことないよ。電子ピアノ買ってもらっただけで本当感謝してる。ただ合唱祭前でピアノ聴く機会が多いから、ふと思っただけ。ピアノは場所もとって邪魔だし、音も大きくて近所迷惑だし……」

私がせっせと言いつくを並べるのに、森宮さんは、

「もう十分わかったけど」

と大きなため息をついた。

「ああ、ごめん。よけい嫌な感じだったかな……」

「優子ちゃん、どうして欲しいものを口にしただけで、そんなに必死で繕おうとするの？」

森宮さんは静かに言った。

「だって……。今だって森宮さんに十分なことしてもらってるのに……」

「十分なことって何？」

「家もあるし、ごはんも食べてるし、私何も苦労してないっていうか……」

「当然だろ？ 子どもが苦労せず暮らせるようにするのって親の義務じゃん。そういうこと言われるなんて本意だけど」

森宮さんの言葉にうつむくしかなかった。遠慮をしているわけでも、本当の親子じゃないと牽制しているわけでもない。けれど、知り合って三年の人に、何不自由ない暮らしを与えてもらっていることを、何も思わず受け入れられるほど私は幼くはない。

「ごめん、ああ、俺、嫌な言い方したよ……。泣かないで優子ちゃん」

森宮さんに言われて、自分が泣いていたことに気づいた。

⑧ 悲しいわけではない。ただ、私たちは本質に触れずうまく暮らしているだけなのかもしれないということが、何かの瞬間に明るみになるとき、私はどうしようもない気持ちになる。

「全然大丈夫」

そう言おうとしたけど、言葉を発するともつと涙が出てきそうで、私は首を振るしかできなかった。

翌朝、私がダイニングに入るとすぐ、「おはよ。パン焼けたよ」と森宮さんはいつもより軽い口調で言った。

「ありがとう。うわ、おいしそう」

私はそう言っただけで席に着いたものの、おいしそうって昨日と同じ食パンなのにうそくさかったかなと後悔したりした。

朝食が始まると、沈黙が訪れるのが良くないことかのように、森宮さんはなんだかんだとしゃべった。「いい天気だ。いや、やっぱり寒いかな」とか、「駅前のスーパーで北海道フェアをやってるよ」とか。私も「そうなんだ」「楽しそう」などとすぐさま相槌を打った。

「もう十一月か。一年つてあつという間だよな」

「本当に」

「なんか年々時が経つの早くなるよな」

「そうだよ。驚いちゃうね」

「合唱祭も近いな。楽しみだよな」

森宮さんはそう言ってから、肩をすくめた。

「楽しみだなんてよく言うよ。ピアノがうるさいって文句ばかり言ってるくせに」といつもの私なら言うだろう。でも、そうは言えずに、「うん。もうすぐだね」とうなずいた。

お互いに気遣っているんだと明らかになってしまうと、軽口や冗談がとたんに成り立たなくなる。場の空気を固まらせないような会話を選ぶのは、難しい。まずは早く朝食を切り上げて、身支度をしよう。私はこんなに飲み込みにくかったつげと思いつつも、急いでパンを口に入れた。

「どうしたのよ。ぼんやりしちゃって」

昼休み、史奈に言われた。

「そう？」

「そうそう。英語の授業中、当てられているの気づかなかったじゃん」

萌絵もおにぎりで口をいっぱいにしながら言った。

「ああ、森宮さんと少しもめてるっていうか、ぎくしゃくしてるからかな」

私は正直に答えた。

授業中、何度か昨日の夜のことを思い出した。あの時ピアノを欲しいだなんて言わなければ、不穏な空気は流れなかったのにと悔やんだり、でも、それって表面的にうまくいってるだけでいいこととはいえないのだろうかと思ったり、考えが頭の中を巡っていた。

「森宮さんって、お父さんだよな？」

史奈に聞き返され、「そう。父と気まずい感じになってるってこと」

と私が答えると、史奈も萌絵も顔を見合わせふざだした。

「やっぱりおかしいよね。高校生にもなつて父親ともめるなんて」

二人の様子に私は小さくため息をついた。

実の父親なら十八年間一緒にいるのだ。今さら関係がこじれることなど、ありえないだろう。

それに確固たる結びつきがあれば、ちよつとやそつとで気まづくなつてなることはない。

「いやいやいや、逆だから」

萌絵は笑いながら言った。

「逆？」

「父親ともめて気にするのがおかしいってこと。うちの場合気持ち悪くて、父親と口すらきいてない」

萌絵が顔をしかめながら言うて、

「うちも必要最小限しかしゃべらないな。あの人と話すと、理屈っぽくなつて話が長くなつて、あーやだやだ」

と史奈も身震いするまねをした。

「何それ。本当のお父さんでしょう？」

「そうだよ。実の父親って、ただただ不潔で厄介なんだって」

萌絵が私に舌を出して見せた。

「不潔で厄介？」

そんな人が家にいたら困る。私が「うそでしょう？」と聞くと、

「不潔とまでは言わないけど、厄介は事実だよ。父親には会わないように、夜はなるべく自分の部屋で過ごすのが得策」

と史奈も言った。

「お父さんたちかわいそう……」

娘にそんなこと陰で言われたんじやたまらないだろうかと、私かつぶやくと、

「優子はいいいよね。森宮さん、清潔だし頑固がんこじゃないし、ついでに若いし」と史奈が言つて、

「本当だよ。そうだ、一ヶ月だけでもうちの親と替かえてくれない？」と萌絵も同意した。

「まさか。本気で言ってるの？」

「本気だよ。うちだつて、替えてほしい。私、高校卒業したら家を出るからさ、あの人、今のうちにとぐちぐち暑苦しいこと語つてばつかなんだもん」

「史奈のそこはまだいいじゃん。うちのは寒いのに風呂ふろ上がりにパンツ一枚でうろつくんだよ。変態変態だよね」

「わかる。あの人たち、自分がおっさんだつてわかってないのかな。周りのこと考えてほしい」

散々悪口を言つて盛り上がる二人に、お父さんたちが気の毒になった。そして、それ以上に、これだけ陰口を叩たたいても共に暮らせるのだと、血のつながりの深さを思い知らされた気がした。

（瀬尾まいこ『そして、バトンは渡わたされた』）

問1 ぼうせん部①「何の話が始まったのだろうと私が首をかしげている」とあるが、早瀬君はどのようなことを考えているのか。ふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 音楽は、威厳を振りかざすものではなく、気負うことなく自然なものであるべきだということ。

イ ベートーベン、バッハ、ヘンデルは人を怖がらせるので、ロッシーニの性格の方が優すぐれているということ。

ウ 音楽家の肖像画は怖いものが多いが、ほほえみを誘まようようなものもあるということ。

エ ベートーベン、バッハ、ヘンデルの作品よりもロッシーニの作品の方が優れているということ。

問2 ぼうせん部②「ぞくぞく」とあるが、このような表現技法を何と言うか。ふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 比喩ひゆ

イ 擬人法ぎじんぽう

ウ 擬態語ぎたいご

エ 擬音語ぎおんご

問3 ぼうせん部③「感動を伝えずにはいられない力」とあるが、早瀬君の演奏のどのような点が感動を呼ぶと「私」は考えているか。説明しなさい。

問4 ぼうせん部④「えつと、」とあるが、この後には「疑問を表す言葉」が省略されていると考えられる。省略された早瀬君の言葉を書きなさい。

問5 ぼうせん部⑤「早瀬君がさらりとそう言うのに、……心臓は高鳴っていた」とあるが、このときの「私」の気持ちを説明しなさい。

問6 Aに当てはまるふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア しかし イ だから ウ むしろ エ もし オ なぜなら

問7 ぼうせん部⑥「ピアノで練習をしていたら」、ぼうせん部⑦「本物のピアノを毎日弾き込んでいたら」とあるが、「私」はどのような演奏がしたいと考えているか。ふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 正しく楽譜通りであり、ミスタッチをしない演奏

イ 柔らかかな音色で、ありのままの自分を表現する演奏

ウ CDとは違う生であることを実感させる演奏

エ みんなの美しい歌声をより素晴らしいものにする演奏

問8 ぼうせん部⑧「悲しいわけではない。ただ、私たちは本質に触れずうまく暮らしているだけなのかもしれないということが、何かの瞬間に明るみにできるとき、私はどうしようもない気持ちになる」とあるが、このときの「私の気持ち」としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 実の親子ではない自分と森宮さんが、答えを出せそうにない「親子とは何か」という問題を正面から話し合うことを避けて生活しているものの、ときによって親子でないがために互いの遠慮によるすれ違いが起きてしまい、その解決の方法を見つけないことができず戸惑う気持ち。

イ 実の親ではない森宮さんに対して、「私」がいつもは何かを買ってほしい気持ちを我慢することで問題なく暮らしているのに、ときによって、どうしてもほしいものができてしまい、それを口に出してみるものの、経済的な理由で買ってもらえないので、後悔と申し訳ない気持ちで胸が苦しくなる気持ち。

ウ ピアノと電子ピアノではどちらが音楽的に優れているかということ話し合わないことで、実の親子ではない「私」と森宮さんは仲良くやってきたのに、ついピアノが欲しいとつぶやいたのを森宮さんに聞かれてしまい、どちらの楽器が優れているかで口論になり、せつかく築いてきた親子関係が崩れるのではないかと心配する気持ち。

エ いつもなら、「わたし」は、家があり食事ができることを森宮さんに感謝する気持ちをいさぐ必要もなく暮らしているが、何かのきっかけで感謝の言葉を口にすると、森宮さんを傷つけ落胆させることになってしまい、今後どのようにすればよいのかわからなくなって困惑する気持ち。

問9 ぼうせん部⑨「史奈も萌絵も顔を見合わせふきだした」とあるが、なぜふきだしたのか。次の空欄にあてはまるように十六文字で抜き出しなさい。

・そもそも〔十六文字〕から。

四

次の各問いに答えなさい。

問1 次の四字熟語の中で漢字の使い方としてふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 無我夢中 イ 異口同音 ウ 馬事東風 エ 公平無私

問2 次の言葉の中で性質が異なるものをそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

- ① ア きれい イ 美しい ウ 青い エ 赤い
 ② ア やさしい イ やさしく ウ やさしけれ エ やさしさ

問3 次の筆者と作品名の組み合わせとしてふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 夏目漱石なつめ そうせき | 『吾輩は猫である』
 イ 芥川龍之介あきたがわりゅうのすけ | 『清兵衛と瓢箪』
 ウ 川端康成かわはた | 『雪国』
 エ 壺井栄つぼい | 『二十四の瞳』

